Osaka University Knowledge Archive

Title	タイ語と日本語における文法構造の対照
Author(s)	Youyen, Pattarawan
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58739
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	ユーエン　パッタラワン
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　9　号
学位授与年月日	平成１２年３月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	タイ語と日本語における文法構造の対照
論文審査委員	主　査　　教　授　　近　藤　達　夫
	副　査　　教　授　　吉　川　利　治
	副　査　　助教授　　田野村　忠　温
	副　査　　教　授　　藪　　司　郎
	副　査　　助教授　　宮　本　マラシー

論文の内容要旨

本稿では、タイ語と日本語の文法構造の対照研究を行い、両言語においてどのような共通点・相違点を持つかを分析し、論を進めることを目的とした。日本語と対照するタイ語とは、いわゆる首都バンコクで話されている標準タイ語である。また、参照文法的に取り扱い、両言語における文法構造の内容を８章に分け、議論する対象を各章は以下の通りとする。

第１章では、本稿の一般的な局面、つまり、研究目的とその範囲、言語理論の枠組み（近藤(1976,1981)による「多重層構造」(Multi-Layered Structures)）、データ収集、研究成果そしてタイ語の表記に関しての取り扱いである。

第２章では、取り上げた言語特徴の面を見れば、タイ語は主語＋動詞＋目的語(SVO型)で、日本語は、いわゆるSOV型の基本語順である。また、修飾語と被修飾語の関係においても、タイ語では修飾語は被修飾語の後に、日本語では逆に修飾語は被修飾語の前に位置される。この点に関して、両言語は一貫性を持つと言えよう。しかし、両言語の語順は対称的、もしくは鏡像関係(mirror image）にあるだけではなく、共通点も存在し、それは「構造的要因」と「情報的要因」に基づく語順である。前者において、述語に現われる要素は、述語と結びつきが強ければ強いほど述語に近い領域に配置され、逆に、その結びつきが弱ければ弱いほど述語から離れた領域に位置される。後者では、情報提供の場合、一般に、主題的な性格を持つ要素は他の要素より、前に配置される。

第３章では、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文、いわゆる単文に関するものを取り上げた。まず、名詞述語文において、タイ語では、「性格づけ」と「同一づけ」は別々の表現で、前者は "A pen B"、後者は" A khuuu B" を用いる。一方、対応する日本語は、「性格づけ」と「同一づけ」の両者とも「A　ハ　Bダ」の一つの表現を用いる。また、「A　ハ　Bダ」は前二者の意味を表わす他、存在、状態または動作のアスペクト（進行）を表わすのに用いられ、より意味用法の幅が広いと言える。次に、形容詞述語文を見ると、タイ語における形容詞は品詞の一つとして取り上げられていない。特に、述語となる場合では、状態を表わし、動詞の下位分類を判断され、名詞を修飾する場合では、名詞修飾詞として扱われている。一方、日本語では形容詞が品詞の一つとして扱われ、動詞と違ってはっきりした形を持つ。また、形容詞述語文の主語の制約においても、タイ語では、感情・感覚を表わす場合、一人称、二人称、三人称のいずれにも用いられて制約がないが、日本語では、一般に、感情・感覚を表わすために、話し手自身の主観的感情・感覚しか表わせないので、平叙文の主語は一人称に限られる。動詞述文において明示した点は、タイ語では、自・他動詞が同形で用いられるものが日本語より一般的であり、日本語では、代わりに、自・他動詞は形態により区別している。また、手段、道具いわゆる具格の格標識を省略す

ることがタイ語によく見られるが、日本語では非文となる。

存在文において、タイ語では、人またはモノ・コトの存在を表わす場合、有生性・無生性を問わず、両者とも同じくmii「ある、いる」を用い、存在の場所を明示する場合、一般にその場所の位置、もしくはthii「に、で、へ、を」用いる。一方、日本語では、より複雑となり、存在する対象の有生性・無生性により存在を表わす動詞の違いがあり、前者は「いる」を、後者は「ある」を用いる。また、その対象も物理的なものである場合では、「に」を、出来事、自然現象である場合では、「で」を存在の場所の明示に用いる。

第4章では、両言語を対照的に取り上げるのではなく、タイ語の文法化現象に注目し、名詞の領域にあるthii の文法化過程をケース・スタディーして、意味・構造を分析した。本章では、内容語であったthii「所」は機能語への発展に従って3つの通路があることを示し、またthiiはそれぞれの通路によって徐々に意味を漂白化されたり文法脱範疇化されたりすることが明らかになった。第1通路では、語彙性の高いthii「所」という意味を持つものからその意味が徐々に漂白化され、第2通路までは語彙的な「所」の意味を残さない。各通路の文法化のプロセスでは、意味漂白現象及び文法脱範疇が同時に起こる。名詞性の高い、いわゆる単独名詞thiiは合成名詞になってその間の過程を通し、第2通路の名詞化詞まで名詞性が残る。その後で名詞から脱範疇し、別の範疇に変化し、第3通路に渡って副詞また合成接続詞になるところまでには、thiiは完全に独立性を失い、他の語・句に付加される地位がより固定化する。また、thiiの文法化のプロセスを見れば、連続体の通路の左の方へ近づいて行けば行くほど、意味は具象的または語彙的になるが、右の方へ行けば行くほど、意味は抽象的になる。

第5章、受動文において、本論では受動性を担う要素thùuk「当たる」及び「～れる、～られる」は助動詞ではなく、本動詞として扱っている。それぞれは語彙的概念を持つものである。前者の「当たる」は、主語が<出来事・事象に「当たる」>と、後者の「なる」と「受ける」はそれぞれ、主語に<出来事・事象が生じる（なる）>、主語が<ある出来事・事象から何らかの影響を受ける>という意味が概念化されている。受動性を担う要素それ自体には、被害･迷惑の意味はない。被害・迷惑の意味を表わすか、表わさないかということは受動文の全体的な意味解釈による。thùukもしくは「～れる、～られる」それ自体は被害・迷惑をあらわすものではない。

次に、受動文の主語の意味役割に関しては、タイ語では、「当たる」のタイプ(i)は「被動者」(patient)、タイプ(ii)は「経験者」(experiencer)、そして当たる事柄は「場所」(locative)の意味役割が与えられる。日本語では、「なる」タイプの主語は被動者、「受ける」のタイプ(i)と(ii)両者とも、経験者の意味役割が与えられる。

また、受動文の動作主についても考えると、日本語では有生性、意図性を持ち、行為を行う主体から自然現象、特定的な機械までを動作主として扱われているのに対し、タイ語ではそれより広範囲に渡る。特定の条件が整えば、動作主として見なされる。動作主それ自体においても、日本語には「に、によって、から」の動作主を明示する標識が3つあり、元々の能動文の主語を付加語化するのを明確するのに対し、タイ語には動作主を明示する標識がなく、また元々の能動文の主語と述語の関係を表面的に保持する形をとる。

受動文において、また、一つの興味深い点があり、それは従来のタイ語受動文の全ての研究においては、他動詞の受動文のみ存在し、自動詞受動文がタイ語に存在しないとされてきたが、本論で示したように、日本語のように一般的ではないが、タイ語にも、自動詞受動文が存在する。

第6章では、使役文を意味概念から分類して、「する」タイプ、「与える」タイプ、そして「及ぼす」の3つに分け、それぞれに対応するタイ語では、<tham-使役文>、< hay-使役文>そして<tham- hay-使役文>、日本語では、「を - 使役文」、「に - 使役文」の2つあり、「及ぼす」タイプに対応する日本語は存在じない。また、各タイプにおいても使役を担う要素は、従来、助動詞として扱っているが、本論では本動詞として扱っている。

更に、使役者及び被使役者の意味観点を考えると、使役行為を起こす際に、意図的に行うかどうかは決定要因として扱わずに、その使役行為を実際に行う主体を動作主として扱っている。動作主の有生性に関しても、人間また動物である主体は典型的な有生物であるが、人間のように自らでエネルギーを持ち活動を発生する主体、ま

たは特定的な操作を受けて人間のように活動を発生することもできる主体であるならば、動作主として扱われる。特定の使役文が強制的であるか許容的であるかという解釈においては、使役文のタイプそれ自体のみでいずれかの意味に属しているかを判断することができない。例えば、<hây- 使役文>、<tham-hây「使役文」>もしくは「を - 使役文」、「に - 使役文」のそれぞれは強制的・許容的意味の両者とも解釈され得る。これに関しては使役行為を起こした際の意味解釈によって、使役の表面的なタイプのみで判断して、強制性と許容性の意味を絶対的に区別することはできないということが判明した。

第７章では、指摘した動詞連続(Serial Verb Constructions, SVCs)は、以下のように３つある。

まず、SVScに関して、タイ語では前項動詞の主動詞タイプと後項動詞の主動詞タイプの二分類であるが、日本語では後項動詞の主動詞タイプのみあり、その中でも、前項動詞において「語幹」の未然形、連用形、志向形であるものと、「テ形」であるものの違いがある。

次に、タイ語では、SVCsにおいて、wîŋ「走る」 pay「行く」のような語彙レベル動詞の連続であるのに対し、日本語では、「**読ま**せる」、「**読み**始める」、「**読んで**行く」、のような形態レベル動詞の連続である。

最後に、他動詞の前項動詞がとる目的語は同時に後項動詞の主語にもなるということを述べた。更に、主動詞の立場によって、両動詞の文法的な相互関係も表わす。例えば、前項動詞の主動詞は他動詞の場合、後項動詞の従属動詞で表わされる行為、出来事もしくは事象の全体は目的語であり、また前項動詞の主動詞が自動詞の場合、後項動詞の従属動詞で現われる行為、出来事もしくは事象の全体は副詞である。

又、動詞の性質においても、日本語とタイ語の違いが現われる。例えば、日本語の「見る」のような動詞それ自体は結果が含まれるが、タイ語ではそうではない。即ち、日本語では、「見る」と言ったら、何かが「見える」という結果が出てくるので、「見て見える」とは言わない。それに対し、タイ語では、mɔɔŋは結果が含まれないので、mɔɔŋ hěn「見て見える」の言い方は通例である。また、日本語では、「倒す」のような動詞においても動作主の責任が動作の完了までかかるが、タイ語では、かからない。つまり、動作主から対象の方へ動作を向けて行う。その後の段階では、対象がその動作を受け、「倒れる」への状態変化になる。従って、「太郎は花子を押し倒す」のような場合では、花子は「押す」及び「倒す」の両者ともの目的語の文法機能を与えられるのであるが、タイ語の場合では、priidaa phàak maalii lóm「プリダーはマーリーを押して（マーリーが）倒れる」では、maaliiがphàakの目的語であるが、それと同時にlóm「倒れる」の主語にもなる。この違いはSVCs内部の文法関係を表わすのに非常に興味深いものである。

論文審査の結果の要旨

本論文の独創点は以下の通りである。

（第２章）いわゆる日本語の二重主語構文（主題―評言構文）―ハ―ガ構文（例　辛い料理は、お父さんは好きではない）がタイ語にもあり、タイ・日両語とも Li（ed.1976）のいう Topic Prominent Language（主題卓立型言語）［Subject Prominent Language（主語卓立型言語）と対立する］であると特徴付けたこと。

（第３章）①A ハ B ダ型の文が日本語一種に対してタイ語には二種 A pen B（性格づけ）と A kɯɯ B（同一づけ）あることを述べたこと。②タイ語動詞に自・他動詞同形のものが多くあるのを日本語では膠着語尾で両者を区別するのと対比したこと。③存在動詞として日本語「アル・イル」に対しタイ語では mii しかないと記述したこと。

（第４章）「文法化―thîi の文法化をケース・スタディーとして―」は、その真価が認め

られて大阪外国語大学言語社会学会発行 *EX ORIENTE* Vol.2 に掲載された論文である。

（第５章）タイ語と日本語の受動文を

①thùuk 当たる型	が受動文　なる型
②　　――――	二受動文　受ける型

と認定して対照したこと。

（第６章）タイ語と日本語の使役文を

①tham 使役文　する型	を使役文
②hây 使役文　与える型	に使役文
③tham·hây 使役文　及ぼす型	――

と認定して対照したこと。

（第７章）タイ語と日本語の動詞連続を

①主動詞前置従動詞後置	語幹＋膠着接辞型 連用形＋動詞型
②従動詞前置主動詞後置	て形＋動詞型

と認定して対照し両言語の平行性（類似性）を発見したこと。

以上の独創点、なかんずく上述後三章は、いずれも画期的な発見であり、タイ語・日本語研究において永久に価値をもつものとして高く評価される。

本論文にさらに改善の余地があるとすれば、それは、論文の全体構成、タイ・日両語の言語感覚的機微にも及ぶ対照、一般言語学的視点の導入であろう。

最後に、著者に対して今後望むこととして、本論文で扱わなかった文法的諸側面も含めたタイ語と日本語の対照言語学的参照文法の構築をあげておきたい。